

ごあいさつ

理事長 村若 尚

大阪富田林市にあるNPO「ふらっとスペース金剛」がこの春『ママたちを支援する。ママたちが支援する。』という書籍を上梓しました。これまでの15年の歩みを振り返りながら設立当時の思いを新たにすることで、ゆめもくばとも重なる部分が多くあり感銘を受けました。

ただ「ふらっとスペース金剛」はだいぶ早くから「女性が働く場」として事業をとらえ、職場としての制度や環境を整備してきました。ママたちのサークル感覚をずっと大切にしてきた私たちとはそこが大きく違うのではないかと思いました。

しかし、この本を読んで、組織が安定することは事業を継続していく上での必須条件なのだという事実を再度認識いたしました。私たちは、より真摯に地域課題に取り組むために、スタッフの働き方や組織体制を見直して改善すべきだと考えます。

また私自身についても、すでに還暦を過ぎていることもあり、次代の長となる方にどのような形で引き継いでいくかという課題も目前に迫っております。プロボノという関わり方が本当に良いのかどうかを含め、考えていかないといけないと思います。

「ふらっとスペース金剛」はジェンダーの問題にも早くから取り組んでおられました。その視点から改めていま周囲を見回してみると、状況は昭和の時代からまったくと言っていいほど変わっていないようです。政府の責任ある立場の人がセクハラすると大臣がそれを擁護したり、芸能人のセクハラがニュースを賑わすと被害者を責める意見がネットで拡散されるなどしています。

先日、女子レスリングのパイオニアとして頑張った父娘を描いた映画を観賞しました。顔も知らない相手と結婚しなければならないような風習が、田舎では未だに残っているインドで、女性がレスリングをするのは当時たいへん革新的なことでした。物語の最後で、大きな試合を前にした娘に、父親が「インドの少女たちのために闘え」と説きます。「女性は家事をして子供を生むだけの存在ではないと皆に知らせるのだ」と。胸が震えました。

ずっとママたちを苦しめてきた問題は、その多くがこのジェンダーに起因する問題ではなかったかと思います。日本の社会はずっと女性たちの無償の頑張りに甘えて来ました。それは私たちの組織とて例外ではなかったかも知れません。私自身をも含め、昭和の男たちは反省しないとイケません。